

(第3種郵便物認可)

「盲目の時計職人」とは、英国の動物行動学者であるリチャード・ドーキンスが著作のタイトルとしても使った比喩(ひゆ)である。進化論に批判的な神学者は次のように言った。「荒野に時計が落ちていたとしよう。あなたは、それが自然によって偶然に生み出されたものと考えらるだろうか。考えるはずもない。当然、時計職人がそれを作ったに違いないと思うだろう。生命も同じだ。時計以上に複雑で精巧な生命が偶然に誕生したとは考えられない。そこには時計を作ったと同じ生命の時計職人(神)がいたに違いない」と。

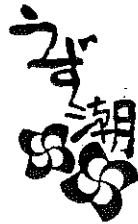
それに対しドーキンスは「そうであるとするれば、その時計職人は盲目であつたに違いない」と述べ、

進化において目的意識のない偶然の果たす役割を強調した。ダーウィンが言うところの自然淘汰(とうた)である。ドーキンスの説が

盲目の時計職人



やまもと たろう
山本 太郎



正しい。その上で、次のような話を聞くと、本当に時計職人は盲目だったのだろうかと考えさせられる。比喩としてではあるが。

進化論を提唱したチャールズ・ダーウィンの生前最後の論文は、英国中部地方の池にすむカメに付着した二枚貝に関するものであった。彼の死の2週間前に発表された。このカメをダーウィンに送った男は、ウォルター・D・クリックと言

って、若い靴職人で、アマチュアの自然愛好家であつたという。靴職人はやがて結婚し、ハリーという名の息子を持つ。ハリーは成長し、

父の跡を継いで靴職人となった。ハリーに長男が生まれたのは1916年6月8日。名前をフランシスとつけた。子どもはやがて成長し、大学では物理学を専攻する。第2次世界大戦中は英国海軍機雷研究所において磁気・音響反応型の機雷の設計にあつたという。戦後、生物学者に転じたフランシスは53年、アメリカの若い研究者と2人で、その後の医学、生物学に革新をもたらすことになる発見を行った。「DNAの二重らせん構造」の発見である。ダーウィンが『種の起源』をまとめるにあつて、彼を悩ませた最大の謎―遺伝の仕組み―を明らかにする発見であつた。

(長崎大熱帯医学研究所教授)